

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月5日)

授業者：〇〇

範囲：正規雇用と非正規雇用

主な感想・代案

- 安定感が感じられ、生徒と教師のやりとりにも余裕が感じられました。また、提示資料や板書計画もしっかりと準備されており、達筆も相まって、授業準備の厚みを感じました。
 - 前時・本時と職業や働き方について生徒は学んでいると思います。これらの内容は、生徒の将来に直結する重要な範囲だと思います。(生きていくためにほとんどの人が働かないといけないので。)。そういう意味で考えた時、〇〇君の授業は「当たり障りが無さすぎる」印象があります。
 - 労働・職業の問題は、自分の経済状態と直結してくるがゆえに、将来的には非常に切実になります。長時間働いているのにお金があまり入らなければ厳しいし、いつ首を切られるか分からない不安定な状況も苦しい。一方で、ぬるま湯のように刺激のない職場もモヤモヤするかもしれないし、自己実現という意味での理想の仕事を追求する姿勢も大切だと思います。これは多くの社会人が(言葉にはしなくても)多かれ少なかれ抱えている悩みだし、中学生が将来の職業選択をしたりする際にも、心の片隅に入れておいてほしいことです。
 - とりわけこの授業が社会科だと考えると、そういった労働をめぐる「光と影」の部分、社会背景と絡めて説明する場面が必要になる気がします。非正規雇用で貯金が出来ず、ワーキングプアになってしまう人が「なまけているから」そうなるのではないのです。そういう社会構造や社会背景があるからそうになってしまうのです。そういった社会的な構造を説明したり実感させられるのは、「総合的な学習の時間」でも「道徳」でもなく、社会科だと思う。ただ、そのような良い意味での批判的な視点が〇〇君の授業には欠けているような気がします。テスト対策的な発想が強すぎる印象があります。
- ⇒ 例えば、主発問は「あなたが仕事に求めるのは、安定ですか？ やりがいですか？」にします。導入では、あえて架空の設定を作り、安定しているけど、やや刺激には欠ける仕事・職場と、やりがいもあり、大成功できる可能性もあるけど、転落するリスクのある仕事・職場の二択を示し、どちらをやってみたいか考えさせます。手を挙げてもらい、意見を聞きます。
- ⇒ 展開では、「やりがい or 安定」の天秤の写真を黒板の端に張った状態で、正規雇用と非正規雇用の話をしていきます。その際に、非正規雇用が単に「やりがい」という話ではなくて、仕方なくそうなっている現状もあったり、企業が利益のためにそういった枠を増やしているという話は触れるべきだと思います。
- ⇒ 女性と労働の話は、ある意味で「やりがい」も「安定」も、どちらも社会構造のせいで選択できていない事例ともいえます。なぜこうになってしまうのか？ 今後どうしていくべきなのか？ について簡単に触れます(ここをメインで教えるとすれば授業がだいぶ変わってきます。今回が言及しません。)

【コラム】理論と実践の接点

職業の話は、生徒にとってはある意味で将来につながる関心ではあるけれども、なかなか身近とは言えない気がします。そういった場面において、「感情移入」を促したり、当事者の事例を「追体験」させるような手法は有効だと思います。方法としては、ややショッキングなビデオ映像を見せてもいいし、「この場面で自分だったらどう思うか？」を考えさせる事例を持ってきてもいい。そういった何らかの感情移入をすることで、授業自体が身近なものに感じられることもあると思います。そういう意味で、安井俊夫の実践は魅力的です。なお、特定の立場への感情移入させることに賛否両論もあります。

【参考文献】安井俊夫(1977)『子どもと学ぶ歴史の授業』